

最高指揮官としてのクセルクセス

クセルクセスのギリシア遠征軍が古典が伝える何百万人もの規模だったのか、それとも現代の歴史家が想定する何十万人程度のものだったのか、あるいはもっと規模の小さなものに過ぎなかったのかは別として、複雑な組織の遠征軍をアテナイまで前進させ、戦闘集団としての機能を維持し続けたクセルクセスの能力を評価しても良いだろう¹。遠征軍にはペルシア人部隊があればアジア各地から徴募された部隊もあり、小アジア沿岸から動員されたイオニア人などのギリシア人部隊も随伴しており、遠征途中から新たに加わったヨーロッパ各地の部隊も含まれていた。これらを有機的な戦闘集団として維持し運用することは簡単な問題ではない。ダレイオスの時に行われたナクソス遠征が示しているように言語や習慣の異なる住民が遠征軍を編成するとき内部の意思疎通を図るのは困難であり、コミュニケーションの齟齬から軍は内部崩壊する危険性をはらんでいる。ギリシア遠征軍は最後に至るまでそのような危機に陥ることはなかった²。

そのギリシア遠征は最初から最後までクセルクセスの戦争であった。クセルクセスこそがギリシア遠征の発動者であり体現者であった。ギリシア遠征がギリシア側資料の伝える柔弱で意志薄弱な人物で実行できるような企てではなかったことは遠征の規模と計画の徹底性から窺うことができる。

クセルクセスを批判的に描くギリシア側資料もクセルクセスの意志の強さを認めている。

¹ A. Sh. Shahbazi, 'Achaemenid Army,' *History of Iran*,

http://www.iranchamber.com/history/achaemenids/achaemenid_army.php: シャーバジはクセルクセスの遠征軍の規模を地理、補給、spada と呼ばれる常備軍組織、戦闘序列から歩兵7万、騎兵9000騎と想定している。ブリアンは計算の根拠を全く示していないが陸上部隊6万、戦闘用艦艇600隻と推定している。P. Brinat, p.544 (Eng. Vers. p.527)。私自身はかつて『西洋古典学研究』誌で論じたように、セストスの船橋を陸上部隊が渡り終えるのに要した日数から陸上部隊はせいぜい4万名、またパレーロン湾の海岸線の長さから艦隊はせいぜい400隻ほどでしかないと想定した。つまり進攻するペルシア軍の優位は陸海ともに防衛するギリシア連合軍に対して絶対的優位を確保していたのではなく、相対的な優位を手にしていただけなのである。この数字は当時の限られた補給能力と補給線の長さから生じるストレス、予想される戦場において部隊展開するのに狭小な空間しか期待できない状況に適合している。しかしその結果、部隊の機動的運用による戦場ではなく、戦場を含む戦域での側面迂回をペルシア側に強いる事となった。また当時の原始的な通信事情から本体による正面攻撃と側面迂回する別働隊による背面攻撃を正確に同調させるのに失敗している。つまり包囲網を完成するのに別働隊による機動は決戦に間に合っていない。実際アルテミシオンやサラミスにおいて艦隊は包囲網の形成に失敗しているし、テルモピュライでも防衛側の大部分が戦場から離脱するのを可能にしてしまったのである。

² ヘロドトスはギリシアから引き上げるクセルクセスに随伴していた将兵が食糧難から撤退途中にある草木まで食べ尽くし、多くの将兵が赤痢などで病死し、病に倒れた将兵は置き去りにされたと述べている。Hdt. 8. 115-117。しかしこれは誇張を交えた物語の類だと思われる。多くの将兵が置き去りにされたのはクセルクセスの撤退が何千キロも道を往路に要した時間の半分で行われたという強行軍の為であった。この種の強行軍には必ず数多くの落伍兵を生じるものである。ボイオティアからテッサリア、マケドニアからトラキアの沿岸地帯という行路は何れもペルシアに好意的な諸国やペルシアの宗主権を受け入れた諸国の領土を通っており、マケドニアからトラキア沿岸にはペルシアが建設していた補給基地が連なっていた。もし途中の状況が悲惨であったとするならクセルクセスを小アジアに送り届けた後アルタバズスが同じルートをたどってマルドニオスと合流するのは不可能であったに違いない。

ペルシア内部の反対論・慎重論に屈することなくギリシア遠征を唱え立案・実行したのはクセルクセスの強固な意志だった。事前にヘッレスポントスに二本の船橋を構築させ、アトス岬に巨大な運河を開削させ、エーゲ海北岸に添って補給基地を用意させたこと、事前にギリシア諸国に伝令を派遣して土と水の献上を求めたことはクセルクセスの計画性、慎重さをよく表している。

複雑な官僚機構を統御して大遠征軍を組織し維持し続けたことはクセルクセスの非凡な才能を示すものではある。確かにクセルクセスのギリシア遠征は失敗に終わり、サラミス、プラタイア、ミュカレーにおいて重大な敗北を喫したが帝国の根幹を揺るがず結果とはならず、エジプトやキプロスにおける反撃の余力を帝国は残していた。

クセルクセスの遠征とマラトン遠征とを比較するとわずか十年の間にペルシアは洗練された新戦術を採用していた。それは戦場を含む広い空間を戦域として有機的に活用することと軍の機動力を活かして側面迂回を展開することである。マラトンで見られた正面攻撃という単純な戦術ではなく、有力な戦力を機動的に運用することによって敵の背面を突くという戦場を含む戦域の側面迂回の戦術を大規模に展開したことである。戦場という限定された空間ではなく、戦域という広い空間に軍を展開するという作戦思想を実用化している点は評価される。テルモピュライにおいても、アルテミシオンにおいても、サラミスにおいてもペルシア軍は敵対するギリシア軍を正面に拘束しつつ有力な戦力をもって側面迂回の運動を行っている。

またギリシア遠征においてもっとも重要視されたのがロジスティクスの問題である。ギリシアへの遠征は軍を狭正面に展開せざるを得ず、前進する軍とその軍に後方から補給する陸路が限られており、大軍を長期にわたって維持するのはきわめて困難であった。マケドニア国境にいたるまでペルシアは食糧補給基地を築いたがそれはペルシア軍が抱える問題の一部を解決する限定的なものに過ぎなかった。輸送船団を前進する軍に併進させるという方法もとられたが、軍が使用する陸路が必ずしも海岸に近くに沿ったものとは限らず、内陸奥深く入り込んでいる場合もあり問題解決とはなっていない。問題はペルシアの勢力圏から出たマケドニア国境からアテナイに至るルートにある。平時以上の食糧の備蓄がなく、侵攻途上の地域に食料供給の余力が十分でなく、侵攻する深度が深いために後方からの補給を望めないというロジスティクス上の問題を遠征軍は抱えていたのである。この問題に対処すべくクセルクセスは遠征軍を長期にわたって遠隔地に展開させるのではなく、可能な限りの軍を集結しその重量でもって短期のうちに防衛側の抵抗を排除するという戦略を採用していたのである。

それに軍が前進するとき必ず生じるのが落伍兵の大量発生である。奇襲という要素を重視するなら先頭に行く兵団は錐の役割を演じることになるが、大量の落伍兵を後方に残置するだけでなく、本隊から切り離されて衰弱していくという危険性を伴うことになる。そのためには軍の行軍は統制されたものでなければならない。